

基調講演

「心理的援助と生活を支える視点 －統合的アプローチへ到る過程－」

村瀬 嘉代子氏（日本臨床心理士会会長・北翔大学大学院人間福祉学研究科教授）



はじめに

このような機会を頂戴いたしまして、皆様とご一緒に学ぶことができますことを大変ありがたく、心から感謝しております。

それで、今日、私のお話しさせていただきますことは、この表題に沿いますけれど、心理学的な意味、あるいは臨床心理学というのは、なにか非常に抽象的な心の内面を奥深く尋ねるといようなイメージが、一般にもたれているか

もしれないのですが、人はこの現実を生活しているので、その人の生活が少しでも生きやすくなるのが、たとえば疾病や、あるいは障害というものが消えなくても、その人の人生が今よりよく生きやすくなるようにできるために何ができるか、そこを中心に考えてお話ししたいと思います。そういう意味で、現実をしっかりとらえて、トータルにアプローチすることが必要ではないかということを考えておまして、そのことを実は、50年くらい前でしょうか、初めて仕事に就きましたときから、当時、そのことはほとんど、あまり関心が払われませんでしたけれども、考えてまいりました。そのことを少しずつ、いろいろ具体的な例の中から、そういう考え方にだんだん結実していったということをお話しいたしますと、続いてそのことを見事に、実際に展開なさっていらっしゃることを田中先生が発達障害という視点から、それから飯田先生が専門家である前に一人の人間として何ができるのかといったことや、あるいは日々の臨床の中に、どうそれを生かすかというお話があるかと思えます。そこで、私は、そういう生活ということの意味を私の仕事の経験から、次第に抽出し、思い至ったという、それをこれからお話しさせていただこうと思えます。

当初、私は長く仕事をするとは思っておりませんでした。大体、人というのは、こんなふうになりたい、こういうふうにより自己実現をしていきたいと、大抵の方はお考えになって努力なさるとは思うのですが、私は、小さい時はものすごく恥ずかしがり屋で、人前で自分から話すことはまずなくて、高校卒業するまで、1回も手を挙げたことはございませんでした。なぜこのような仕事を未だにやっているのか、本当に不思議でございます。お話しするのがとても苦手なのです。

ただ、思いましたことは、与えられた場とその条件の中で、この中でできることは何かとい

うふうに生きて来ようと思って、私は今日に至っております。

このように考えてみますと、自分のやろうとしていること、行っていることは、自分の置かれた場所で、自分の責任のとれる範囲の中で、どれぐらいのことを引き受けてやるべきなのか、やれるのか。あまりにも責任がとれないことを気持ちばかりが先走ってすることは、かえって混乱を招きます。そしてまた、自分が、今していることの、これは長い歴史とそれから社会というのは、自分の身近な人との関係、あるいは、少し距離のある友だちや職場の関係、それから、もっと広く、地域や、いわゆる広くひろがっていくわけでございますけども、そういう空間的な広がり、時代という流れの中で、今、目の前のことをやっていることにどういう意味があるかという、そういうふうを考えながら臨むべきであろうと考えてまいりました。

さて、学問というものに対する考え方は、どちらかといいますと、わが国における主流は、先に理論や方法があって、それを現実にご適用するかというようなアプローチが多いかもしれません。しかし、人が少しでも生きやすくなれる、生き難さを和らげていくという、その目的から考えますと、私は、先に理論や方法論があるよりも、目の前の現実をよく見て、それにふさわしいものを帰納法的に抽出して洗練していく、そういう中から理論や方法は、形成されていくべきではないだろうかと考えております。

当節は、あらゆる場面において、マニュアルが広く教えられております。もちろん、物事の標準を知る、それから、ある一定のことについて共通理解を持つということは必要ですけれども、でも、人が生きていくという、一人ひとりの方のご事情というのは個別的に違ったものであり、複雑な要因が絡まっております、そんな単純な右上がり一直線のような考え方や方法だけで、すべて賄うということは、やはり無理ではないか。現実の特徴というのは、私は、二律背反状況だと思うのですね。なぜ、生きていくのが難しいかということ「こうすればこうなる」という、仮に $y = a x$ のような式を用いて、それで事足りるのなら、そんなに人はやらなくていいわけですが、一方で「こう考える、だけど、こういう考え方もある、現実の手元にある条件のほうは」ということを考える。その中で、どう振る舞うかというのを選びとっていく。それは大変難しいので、私たちは、やはり、生きるうえで常に迷わざるを得ない、悩まなくてはならないというわけで、この二律背反状況だということに見て見ぬふりをして、どこかだけ、割り切っていくことには無理があるのではないかというふうに、ずっと考えてまいりました。

家庭裁判所調査官として

それで、今日の生活ということにつながる、それをふと思った、その経験を最初の出発点に振り返って考えてみますと、私は1959年に家庭裁判所調査官になりましたが、今日では、書店に行くと、心理学とか精神医学の本が、どれを買おうかというぐらいに溢れておりますけれども、当時、そういうものは本当に少ない時代でございました。大学でも、そういうカリキュラムというのは、あまり習いませんで、実験心理学が主流で、私は統計とか実験をやってしまし

た。当時の何人かの先生は、「臨床を専攻する人は頭が悪い人です」というのを壇の上から臆することなくおっしゃっておいりました。

ところが、そういう統計などを主に学んできて、家庭裁判所調査官になると、非行をしてしまった少年に会って、じゃあ、この子をこれからどういうふうに援助していったらいいのか、どんな手法がいいのか、それから、この子の言っていることは、はたしてどこまで本当なのか。そして、少年が言葉で言っているこれを仮に信じて、この少年は言っていることをどれだけ実行できるか。そのことを的確に見極めて、意見書を書かなければならないわけですけど、それについて自信を持ってこうだと言えるような知識や技術、経験はゼロからでした。そういうものがないことに、私ははたと困惑し、そこで、私は、経験を基にしなが、出来る限り、いろんなものを吸収していかなければならないというふうに思いました。

裁判所とは、基本として、実証を大事にするところで、フィーリングだけで物を考えるということはある得ない場所でございますから、その少年が、一体どんなふう生まれ、これまでどうやって育ち、暮らしてきて、今、どういう条件下に生活しているか。それから、少年の素質やいろんな能力がどうかというような、そういう一つの客観的事実が大事ですけど、一方で、その少年なりに「自分は真面目になりたい」「今度、こういうふうやって、しっかりやりたい」と言うわけで、それはやれる可能性が100%かということ、いろんな条件を考えてみますと非常に難しいわけですけど、こういう時に「とても君にとって、これは無理で、うそでしょう」とだけ考えていいのかどうか。人から信じてもらったことがなかった人間というのは、人を信じることができないだろうと私は思うのです。したがって、ただ無理な、幻想的な意見を書くことは、それは仕事になりませんけれども、でも、その少年の主観というものをまったく抹消するよりは、大事にしたい。そう考えてみると、その人の語ることに素直に耳を傾けたいということと、しかし、それは現実の生活の中でどれだけ実現できるか、可能性があるかということについて、私は責任を持って意見を作らなければならないということで、すごく仕事が難しい。こんなことは、何か一元一次方程式のようなもので考えられるようなことではないと、任官してすぐの頃に思いました。

それから、得てして学問の言葉というのは、あまり日常では使わない、特異な術語が多いわけですが、本当は、公共性のある表現をして、内容は落とさないけれども、誰が読んでも分かるような表現でないといけないとだめだということに気がついたのです。それから、もう一つは、自分はどうか仕事するかというのは、組織の中で仕事をするわけですので、その組織の中で自分はどうか役割を担って、それから逸脱せず、しかし、役割から逃げないで、全体の調和の中でどう責任を果たすか。それも実は、臨床の仕事にはとても大事だということに気がつきました。

ある事件に、10何人も少年が関わっていて、その在宅事件ですと、主犯の少年から順番に呼んで面接するわけですけど、一日で終わらなくて、何日かに渡るわけです。そうすると、最初に呼ばれて面接を受けた少年は、帰ってから共犯仲間に、俺を呼び出した担当調査官はこんな人間だとか、何か、子ども同士でいろいろ話すのですね。当時、私は若かったですから、今

よりも、きっと少年からすると裁判所というイメージとは違う、何かとても素人の何かよく分からないような、人のよさそうな、そんなことをいろいろと思ったのではないのでしょうか。

ある時、私が裁判所の裏門から帰りましたら、そのことに気がつかなかったのですが、少年が、私がどこに住んでいるかということ調べるために後をついてきて、私の住まいを訪ね当ててしまったのです。私は家族から離れて一人で暮らしており、夜、自室の窓の外から、窓にプチッと音がして石が当たったようで、おかしいなと思ってみると、パーと庭の奥から表に逃げるのです。少年の「ああ、やっぱりここに住んでいた」「ここだあ」という声が聞こえてきました。これが、もっと相手が違えば、ロマンチックな青年なら、恋愛に発展したのかもしれないのですが（笑）。

私は、この少年をはじめ、子どもたちの多くに「ああ、本当に居場所がないのだ」と思いました。「夜遊びをしてはいけない」「よい友だちと交際しましょう」と言っても、実際にさまざまな意味で底辺をさまよっている状態の子どもに、それじゃあ恵まれたトップクラスの子どもが、すぐ君と友だちになろうっていうふうなことが起きるかといえば、これは理念であって、非常に難しい。本当は私にもっと余力があって、いろんな意味で、それをしても差し支えがない、しかも、本当に責任がとれる立場なら、こういう子どもたちに、どうぞとってお茶でも飲んで、もうちょっと気持ちがほかに変わっていくようなやりとりでもできればいいのにと、その瞬間思いました。しかし、裁判所の職員はそのようなことはできません。家庭訪問をして、何か持っていくのは、それは筋が違うことですし、いわんや自分の住所を教えるなんて、とんでもないことです。私はすぐ電気を消して、真っ暗にしておりました。そうすると、また、プチッと石が当たるのですが、もう、これは窓を開けないと思って、また夜にフラフラしているのだなあと、黙っていると、下から少年たちの「おかしいな。さっき電気がついていたのに、早く寝るなあ。もう寝たのか」という声が聞こえてきました（笑）。その後、行き場がなくてフラフラしている子どもたちは帰っていったわけです。

いきなり少年院から退院して社会に出る。これは、いろいろ段差がございます。それから、病院から退院して家庭に帰っても段差があります。ですから、それを埋めるような形の居場所というようなものを、自分の家庭を開いて提供できるようなことを、もしできるといいなと、ぼんやりその時、思いました。家庭ができるには相手も要るわけで、全く、そんなあてもないときにぼんやり、そういうことを思っていました。私の臨床の原点というのは、そこにあるわけです。

留学中の気づき

それから、自分ではそんなこと夢にも願わず、「行きたくない」と泣かんばかりにお断りしたのですが、裁判所の研修所を終了時に「あなたは留学するのです」と言われて、アメリカにまいりました。

今日と違いまして、1ドル360円。日本人はほとんど会わないような状況でございました。

カリフォルニア大学バークレイ校に留学したのですが、精神分析にほとんど則った教育が、ここではなされておりました。最近はいよいよ変わってまいりましたが、当時の日本の専門書というのは、非常に難解な術語が苦心をして翻訳されていて、言葉が非日常的な感じを受ける文体でした。これに比べ、バークレイでは、大学のどの先生も、中には世界的に著名な先生もいらっしゃいましたけれども、非常にクリアで美しい、誰にでも分かるような英語で、ほとんどの方がお話しになる。それと、物腰が権威主義的ではなくて、それこそ、ものの本に書いてあるクライアントセンタードアプローチととてもよく似ていて、「学派の違いって何だろう」ということを考え、衝撃を受けました。

日本にいて本を読んでいた、「ロジャーズの考えは○○」「精神分析は○○」「行動療法は○○」と思っていたのだけれど、バークレイ校に来ると、何かそんな違いを感じなくて、精神分析の講義も言葉がやわらかくて、もちろん私は、全部、スラスラ分かるわけではありませんけれど、でも、達意で、平易で、しかも内容はきちんと高い。そういう言葉を聞いて、非常に印象に残ったというようなことをボソボソと先生に申し上げたら、先生が「人に対しては分析するのではない。“try to understand”理解しなさい」とおっしゃいました。当たり前のようなことですが、これを実際に行うというのは大変難しいことです。

それで、いろいろ記録を読みますと、当時は人手が足らなかったこともございますけれど、少年鑑別所の鑑別結果などはゴム判を使って、意志薄弱、情意不安定、即効性、爆発性とか、それらをつなぎ足した報告書が書かれたという事実もあったのです。だけど、非行をやるような少年で、意思堅固で情緒が安定していて、熟慮型というのは、逆にいうと居るのでしょうか。問題性を列挙して、つなぐだけでは、それで描き出される人物像は、なにかすごく没個性的です。大事なことはその人、その人を理解することだと思うのですけれど。ところが、アメリカで私の実習に伺ったところは、それはレベルの高いところではございましたけれども、それでも平易な言葉で、しかも、事実をして語らしめる。書いている方の解釈や感情がごちゃ混ぜの英語でなくて、事実が書かれて、それについてのこういう根拠で、こう考えられるというふうに書いてあって、「話をするときや文書を書くときに事実をして語らしめる。これが大切なのだ」ということに気がつきました。仕事するときは平易で公表性のある表現が大切で、しかも、内容そのものは豊かに正確を心がける。関係性の基盤というのは、言葉ばかりでなくて、さっき言いましたように、そういう先生方がとても、良い意味で謙虚でいらっしゃるということ、その人の人間性が大切だということを1960年代の初めに強い印象を受けて帰国致しました。

統合失調症圏の人々との出会い

それで、日本に帰ってまいりましてから、非行少年の中にも精神の病をもっている人がいるし、そういう少年をどう支援するか、そういう研究をするようにということで、児童精神科の病棟に週1日派遣されるということになりました。児童病棟に行ってみると、本当に人手がな

くて、お世辞にも清潔とは言えない環境でした。しかも、これもまた衝撃でしたが、最初のその日に、当時と違いまして、まだソケットに電球をつけるという、そういう照明がついている病棟に、自殺をはかった12歳の少年が、電球を外してソケットの中に指を突っ込んで、感電死をしようとしたのですけども、夜尿がひどいので、シーツの下にゴムが敷いてあったので、電気が通らなくて助かった。ちょうどその後に行って、叫ぶその子を抱いて連れて行かれるのを見ました。病気を治すということのほかにも、長期にそこに入院している方にとっては、病棟は生活の場です。生活の場が整わないということは、そこで心が治っていくというのは容易ではないと思いました。

留学から帰って来て、「研究員として、面接法や心理テストの研究をするために病院に来ました」と言うよりも、看護師の仕事はできませんけれども、せめて助手の方の仕事で、お掃除とか、洗濯するほうが、本当はここにいる子どもたちのために意味があると思って、師長さんにそう申しました。師長さんは「とんでもない。あなたにそんなことはさせられない」とおっしゃいました。今と違って、病院に院内学級というようなものはない時代で、入院すると子どもたちは本当に手持ち無沙汰でした。そこで私はおやつを配ったり、勉強の相手をしたりする、そういう役をすることになりました。

お盆におやつをもって部屋に入って行きますと、私が自己紹介する前に、子どもたちから「ええ?! あんたはシゾ?」と言われました。シゾというのは統合失調症の隠語です。「シゾが治ったお姉さんだね」と言われて(笑)。もう1人の少年が「ああ、シゾは治るんだ。お姉さん、シゾが治って今、大学に行っているのだね」と聞いてきたんのすね。それで、本当でしたら、「家庭裁判所調査官研修所の研究員です」と言ってあいさつするのですけれども、子どもからすると、「統合失調症が治って、この人は復学できているのだ」「こういう生活もあるのだ」と痛切に思っている様子でしたので、何かつい言いそびれてしまいました。「あの…」とか言っているうちに、とうとう「シゾの治ったお姉さん」と言われ(笑)、子どもと一緒に過ごしました。

そのときの子ども達は私のことを仲間だと思うので、いろいろ本当のことを言うわけです。統合失調症の診断を受けている子どもたちが、いつも混乱しているばかりじゃなくて、「お母さんとしっくりいなくて、居場所がない」という辛さや、「兄弟の中で期待を裏切って、なんで自分は生まれてきたのか」という悩みなど、自分と周囲のことがわかっていることが多いのです。やっぱり、その子その子で、何かをもっている。

私たちは、この人はこうだということを、当然、自分の触知しうる手がかりを基に考えますが、人というのは、「とき」と「ところ」「状況」によって、いろいろ変わる。「この人はこの程度だ」と思うのではなくて、もっと何か考えることが要るのではないかというのをその時に痛切に思った次第で、だから、先ほど申しましたように生活ということが、やはり大事な関心であったわけでございます。

そしてまた、同じ統合失調症の患者さんでも、その人自身の病態、重さが同じくらいであっ

でも、「ご家族がその人をどう理解しているか」「職場や学校がどういうふうであるか」「近所、その地域がどうであるか」ということによって、その方の予後が違っているということに気がつきました。当時は、こうした重い病状の方々に心理療法をすることは是非かというような議論が盛んでしたけれど、私はそういうことを抽象的な討論で考えるよりも、今日の冒頭で申しましたように、責任のとれる範囲で、その方が少しでも生きやすくなるような具体的な生活の中の事柄を手につくところから取り上げて、少しでも改善すれば、統合失調症そのものは、治癒するということがなくても、生きていかれるのが少し楽になるのではないかと考えることのほうが、現実的ではないかと思った次第です。

発達障害児の方々とかわって

その次には、発達障害児、自閉症の子どもさんに会うようになりました。70年代当時というのは、それまでの子どもを受け入れる、子どもの気持ちを汲む、子どもの動きについていくという、そういうプレイセラピーの基本とされていたアプローチが、発達障害の子どもたちについて考えると適さない、あるいは、かえって状態を悪くすると言われていました。もっと危険のない、もっと科学的アプローチが必要であるということが盛んに言われた時代です。

私はどこか素直ではないのかもしれませんが、でもプレイセラピーとひとことで言ってもAさんがやるのとBさんがやるのとCさんがやるのと、それぞれ違うと思うのですね。何というのでしょうか、この機械はAさんが持ってもBさんが持ってもCさんが持っても、この機械であることには変わりがないと思いますけど、人に関わる、遊びを通してその人の気持ちを表現させ、分かち合って、やりとりをしていくというのは、当然、こちらの人として持っているいろんな特徴が影響するはずなのに、そんなことは何も言わないで、「プレイセラピーはだめだ」と、ただ単純に決めつけていいのかどうか。もちろん、重い行動障害が伴う自閉症の方などに対して、いろいろな配慮が必要ですが、ものを考える時に一元的に考えるのはどうかと、ふと考えました。ただ、私はとても自信がなくて、引っ込み思案なので、じかに誰かにそういう反論をするよりも、実際にやってみる中で意味がありそうなことを確かめようというふうに考えました。あと、療育も科学的であると申しますか、およそのプログラムがあって、どちらかという、かなりきちっと構造化されているように思われました。

文法的にいうと下二段活用のような「せ、せ、す、する、すれ、せよ」みたいな、やらせるというように見えるようなやり方が、療育にも往々にしてあり、私は障害を持っている子どもであっても、あるいはそういう子どもであるからこそ、生活の幅や人間関係も広がっていきにくく、帰る家にも、楽しさとか喜びが見つかることが必要だろうと思いました。ですから、駆けっこをしようと言え、なかなかそういうのができない子どもでも、私たちセラピストが子どもをおんぶして、おんぶしたものと士でジャンケンして、オニゴッコをすると、その子どもはケタケタ笑っていたりします。それから人を追いかけるということも、ただ追いかけるというようなことを指示しても、何かただ見ている感じですね。たとえば外国では、新婚の夫婦の

車の後にきれいないろんなりボンの先に空き缶つけて、カラカラいわせて走るのですが、逃げる時に足からりボンつけて、小さな空き缶をカラカラ言いながら、私たちが逃げると子どもが面白がって追いかけるとことがある。つまり、その状況で工夫することが大切で、「どうせ無理だ」というのではなくて、本当はその状況に即応した工夫をその時に作り出していかなければならないのですが、その中に楽しさとか喜びを関わりの中に組み入れていこうということが必要だというふうに思いました。

それから当時は、セミロングヘアという髪形がはやっておりましたが、こういう重篤な障害の子どもさんを持っているお母さんは、オードリー・ヘップバーンみたいにショートカットに多くの方がなさっていました。私は、これは、お好みでショートカットにされているというよりも、子どもさんを預かってもらう人がない。とても難しい状況なので、手間がかからないように、こういう髪をされているのではないかと思って聞いたら、「そうなんです」とおっしゃっていました。人は親であると同時に、自分の人生というものを大事にするから、初めて身近な人の人生も大切にできると思うのです。「24時間365日親であることだけを考えろ」と、そんなことは無理でしょう。私は、そこで、本当に1週間に数時間でも、お母さんが子どもを連れて、気をつかいながら買物するのではなく、たまには美容院に行く、お買物もゆっくりする、あるいは、ウインドウショッピングして気分を変えることができることが出来ないだろうかということを考えました。今は児童相談所にメンタルフレンドという制度ができましたが、（この先駆けである）治療者の家庭教師というのはどうだろうか。子どもからすると遊び友だちのような、あるいは人生をちょっと先に歩んでいる人生の先達のような大学院生と一緒に勉強などをすることに意味があると考え、それをずっとやってまいりました。そのうち、これがメンタルフレンドという形で、児童相談所で取り組まれるようになりました。

境界性人格障害といわれる青年のための通所施設の立ち上げ

それから、次に、今で言う境界性人格障害といわれるような、そういう青年たちのために、たとえば病院を退院しても、次のステップが見つかりにくくて行き場がないというような方々の問題が深刻であるということに気がつきまして、それで私のところで勉強した人が、安定した職も捨てて、ご自分の私財を使って、こういう人が通って来られる施設を造りました（紀要編集委員会より。この施設についての詳細は、村瀬嘉代子（1996）「よみがえる親と子～不登校児とともに～」岩波書店をご参照ください）。社会に出て行くための途中の中間ステップといえます。そこでどういうことだったら、やれそうか。あるいは、いきなり学校に復帰できないけど、遅れている学力をどうやって取り戻すか。そういう通所施設を立ち上げられるのをお手伝いしました。「自分は能力もなく、心も病み、すさんだ生活して、何の取りえもない」と訴えていた子どももいましたし、強迫傾向が強くて何をやっても遅いというような子どももいました。子どもたちからすると「世の中は自分のペースで生きていてもいいのだ」という経験がなければ、「人やことに合わせてやってみよう」とは思わないのではないのでしょうか。

そこの施設では、古いマンションを借りて、最初のうち、私も汚い壁を子どもたちと一緒に塗ったのですが、強迫的な青年が壁塗りをすると、30センチ四方を塗るのに30分かけているのですね。本当は、私、結構そういうのが早くて上手なのですが…（笑）。でも、せっかくこの人がやっているのだから「こここのところはあなたが塗ったのよね。ありがとう」と伝えることで、これまで「自分は作業が遅い」「自分に価値がない、駄目だ」と考えていた彼らに、違った風を送れるのではないかと。そういうことを全体の作業に組み込んで、計画をしていました。あと、お味噌汁を作って、お昼だけは一緒に食べる。食事の準備のときにジャガイモの皮ひとつむくのに、まあ、20分以上かかる人がいるのですが、その人が作る時は、用意を始めるのは早くして、「いいから大人に任せなさい」ということなしに、彼が作ったという、そういう充足感が持てるようにと考えてやりました。この施設では、青年達が運転免許なども持ってないと、就職がなかなか難しいという事情に何とかしようと考えました。いきなり、自動車学校に行くと、段差があるので、運転席の模型を作って、前進、1段、2段、3段と、足の踏み方の練習をやってみる。そして、自動車学校を退職された先生に来ていただいて、教習所よりももっと分かるように、叱らないで教えていただくようお願いしました。子どもたちの多くは、もう何倍も練習すると、やっぱり出来るようになるのですね。一番すごかった人は、101回目に筆記試験に受かった。たとえば、勉強大嫌いで国語力が全然ないという子どもも、運転免許試験のために国語学習を頑張った。人間は目的があると努力も続くのだと分かり、結論だけ早く言っていますけど、たとえば、英語の勉強をするのでも、ご定年でお辞めになった英語の先生をお願いして来ていただいて、子どもたちにも「本物の英語が習えるのだから」と伝えると、子どもたちも少しずつ変わって行けるというようなことを経験いたしました。また、一時期は運転免許をとっても対人恐怖傾向があって恥ずかしく、挨拶もできない青年がいました。それで、この施設で小さな運送業を始めたのですが、目的の家だと分かっても、「こんにちは。荷物です」という声がかかれなくて、ガソリンがなくなるまで都内を走り回って帰ってくるということがありました。これじゃあ大変だということで、スタッフは一緒に乗って、挨拶の仕方とか見本をみせていきました。このように、いきなり運転免許をとっても、すぐには会社に勤められないことが多いのですが、いわゆる途中のケアをきちんとすると、勤めることが可能になる場合が往々にしてあるということが分かりました。本当は、私はせっかちなのですが、この施設に少しお手伝いをすることで、相手のペースに合わせながら、しかもA君に適した方法をB君にも使おうというのではなく、物事って2回目、3回目になるほど効き目が薄れていきますので（笑）。もう、毎回、毎回、何か考える。これは随分大変でしたけど、「物事というのは決して道がないわけではない」ということを青年たちから教えていただきました。

民事事件の鑑定から

それで、一方で、こういう緩やかでも成長曲線に沿って考えるということのほか、1970年代の後半から日本では非常に離婚が増えてきました。ある時期までは、離婚すれば小さい子

もをお母さんが育てるということが、大体、日本では暗黙の共通理解のようなことになっておりましたけれども、お父さんも子どもを育てたいというようになりました。しかも、お父さんやお母さんのご両親が、まだお若いことが多く、おじいさん、おばあさんが見て育ててくださるということで、子どもの親権をお父さんとお母さんの間で熾烈な争いというのが非常に多くなりました。これは必ずしも、法的判断に直接なじむということではなくて、私は、日本で初めてだという、どちらの親が子どもの親としてよいかどうかという、その鑑定をせよという依頼をいただきました。

この時、考えましたことは、物事というのは、涙をのんで、よくよく熟慮したうえで決めなくてはならないということ。そういう時に、今日、初めから申しますように一元一次方程式のような平板な理屈ではなくて、いろんな角度から物事を考えて、それで「こうだろうか」「ああかもしれない」というような熟慮が要るということが改めて思い到りましたことと、それから、たとえ小さな子どもであっても、やはり子どもなりの意思や気持ちがあるということです。それをどうやって、一人の人間として、子どもの意思を的確に聴きとることができるか。それをまた適切に法廷側に届けることができるか。こういう、新しいそして難しい課題に直面しました。

事実を告げるインフォームド・コンセント

またそのことに関連しまして、当時、特別養子制度という、つまり、本当に子どものための養子制度であって、戸籍を見ても、すぐ養子だとは分からないように記載する。それだけに、親権のある親は本当にしっかり子どもを育てていくかどうかということに、覚悟があるかどうかということの見極めが大切です。また、子どもにどうやって養子であるということを告げるか、その事実の告げ方にどういう配慮が要るのか。それから、ちょうど、この頃、わが国でも生殖医療について法制化が必要だということで、法務省で審議が行われておりましたが、これを、これまでは法律家と産婦人科の医師だけで行ってきたけれど、人間の絆というのは、心理学的にみて、どういう条件があればいいのか。血縁がなくても、どこまでそれがどう可能かというのを、私に、この審議会に出てきて意見を言えと、裁判官と検察官の方々に言われました。そんな人さまの人生の根幹に関わるようなことを私がどうこう申し上げることは大変はばかれて、ご遠慮いたしましたけれども、結論として、そちらで自分のそれまでの臨床経験を基に、ご一緒にお話をさせていただきました。

つまり、物事というのは、単純に、何かマニュアルとか、スタンダードだけじゃなくて、本当にこういう問題に当たればあたるほど、その人の個別的な要因、などなど、その人の事情、背景というものをよく考えていくことが必要であるということ、若いときから考えてはいたことですが、さらに一層、痛感したわけです。

養護施設に入所している子どもたちと出会って

そして、養護施設の子どもさんに、ふとしたことから出会うようになったのですけれども、これは家族のイメージをどう持っているか、どうかということが、その子どもが大人になった時のあり方とどんなふうに関係するかということを考えました。人というのは、成長する時に、自分の親を人間としてのあり方の基本のモデルにすることが多いわけですが、自分の親から虐待される、あるいは、親から遺棄される、家族を知らないという子どもは、一体何を拠り所にして健やかに成長していけるものかどうか、というような問題意識を持ったことから、養護施設にお訪ねすることになりました。お盆やお正月に、ほどんどの子が親元や親せきをたどって外泊するのに、何もリソースがなくて、ポツンと残っている子が施設の中に、最近では事情が厳しく、2割くらい残っているというところが増えておりますけど、その当時は、60人ぐらいの定員のところだと、2人か3人でした。私は、そんなガランとしたところに残っている子がいるなんて忍びなくて、つい「よろしかったら家に来られますか」と施設長さんに申しましたら、待ってましたとばかりに「お願いします」と言われました(笑)。それからのご縁で今日まで、お正月とか夏休みの短い期間ですけど、こういうお子さんをお招きしております。お招きして思いますのは、最近では、この虐待ということが社会現象のようになって、虐待に関心が深まることはよいのですけれども、「虐待された人は愛着障害を持っていて心が傷ついていて人格的に歪んでいる」といったことや、「行動化が顕著だ」とか、非常に固定化して、否定的な面が強調されます。私は、人は、やっぱり、そこから回復していけるということをしっかり心にとどめたい。また、そのために役立つ、別にこれは専門家、非専門家に関わらず、自分のできる立場で、「どういう自分のあり方が大切であるか」ということを考えるような社会になることが必要だと思います。「それは養護施設でやってもらう」あるいは「専門家がやるべき」ということでは、こうした問題は解決しないのではないかと思うのですけども。たとえば、そういう子どもたちと接していて、「人の気持ちを察するのよ」ということをただ抽象的に言うよりも、一緒にご飯を食べている時に、何かちょっとしたおかずが大鉢に出てくるときに、これ好きだからといって、自分だけ大きくとって、大きなトンネルの穴みたいなのを掘ったのをそのままあげるのか。それとも、取った残りをもう1回、山は小さくなりますけど、きれいにして、お先にといて回すのか。人の気持ちや立場を思いやっていることが本当に伝わるのは、いま申したような振る舞いを何気なくすることの中でこそ、むしろ、しっかり伝わるのではないのでしょうか。

私は、理論や方法論は大事ですけど、日常生活を心のこもった、決して経済的に贅沢ではないけれども、精神的に豊かなものにすることが人の心を癒し、育むうえで非常に大事だということに改めて、養護施設にいる子どもたちと接して思ったわけです。

重複聴覚障害者の人々と出会って

終わりに、本当にエキジビションで、これも思わぬことに、聴覚に障害のあるのに心を病ん

でいらっしやる、あるいは発達障害を持っていらっしやる、肢体不自由を持っていらっしやる、そして家族の背景も恵まれなくて、非常に重篤な人々を対象に面接をしてほしいと依頼されました。「何もできません。引き受けられません」と言ったのですが、遠方から何度も施設長がいらして下さったので、その施設に何うことになりました。

それで、人手もないですし、利用者の方々の多くは、コミュニケーションの方法が身につけておられないわけですね。就学をしていない方もおられました。NHKのテレビを見ていると、聞こえない人は手話を覚えれば、手話で通じるのではないのかと簡単に思いがちかもしれませんが、まず、こういう障害を持っている方々はその手話を覚えることも大変なのです。それから、実は、私もこの時、知ったのですが、手話には日本手話と伝統手話という2通りございます。日本手話というのは、正しい日本語の並びに応じています。伝統手話とは「私は昨日、学校で旧友に会いました」という、これは普通の文体ですけど、「古い友だちに会ったのよ」でその後に「昨日」「学校で」というふうになります。一番伝えたい言葉から話されるのです。もともと聞こえない方の手話というのは、後者のような話順が多く、いわゆる日本語の構造とちょっと違っていています。実はそういう意味で、とても聴覚に障害がある方は、人とコミュニケーションとるのに、ご苦労なさっているということが分かりました。薬物投与されても暴力がおさまらない人、終日、床に寝転がっている人、人と交流しようとししない人など、どうかかわったらよいか困っている人に何か心理的援助をしてほしいと依頼されました。どうしたらいいのかと考えました。インターネットでも調べてみたのですが、こういう人にどうアプローチするかという、そういう精神療法の本は、当時は殆んどありませんでした。

このカタツムリの貼り絵を作ったのは自閉症の青年で、殆んど時間、床に転がっている人だったのです。ただ、カタツムリを捕まえてくるのが趣味で、部屋の中にカタツムリが一杯ゴソゴソ這っている。あとは、本当に誰ともやりとりをしないで、カタツムリを眺めている人でした。2人部屋なのですが、大抵の人は彼と一緒に困ると言い、今の同じ部屋の人が我慢しているということでした。学校もほとんど行けなかったということですし、それで、絵を描くのはどうだろうということになったのですが、描くというのは、自分の中でイメージを構成する力が必要になります。そこで、ちぎった折り紙を貼っていくという、貼り絵であれば、描くのはよりはできるし、何か自分で作ったものが形になった、ほかならない私がやったことということで、喜びに少しはなるかもしれない。でも、貼り絵をしてといっても、なかなかそれが難しかったので、好きなカタツムリを貼ってみようということにしました。それで、当時、飯田先生が大学院生でおられたのですが、飯田さんや、大正大学のカウンセリング研究所の人にサンプルを作ってもらいました。それでその貼り絵サンプルを青年に見せて、ちぎっていった紙を渡して、作ってみますかと言いました。それで、これを言ってもいいかしら（笑）。本当に能力の低いと言われていた青年の作った貼り絵は、飯田さんたちの作ったサンプルよりも上手でした（笑）。

もう、ほとんど床に転がっているという青年が、自分の作ったカタツムリの貼り絵を見て、

ニコリ笑って、こうやって、頭の上にカタツムリの角のまねをして、部屋をスキップして出て行かれたのです。彼がスキップできたというのも発見でした（笑）。

それで職員の方々は、この人はこの程度だと思わないで、その人その人に合ったものを探すのですねというので、施設の雰囲気が工夫してみようというふうに変わったきっかけとなった出来事でした。でも、これは常にやっていないと、こういう方がいるからというのではなくて、水がよどまないように、いつも努力は要るわけですけれども。

おわりに

人を援助していくという仕事は、援助者自身のあり方が大きく問われると思います。自分自身の考え方や感じ方をこれでいいのだというふうに安易に自己満足しないで、客観的にとらえようとしている、そういう総合的な視点が大事だと思います。

それから、よい意味での好奇心とか想像力とか関心を広くたくさん持っていて、いつも何かこう新しい工夫ができるように、自分を高めようとする人。

また、言葉というのは大切で、自分の話していることが、こういうことを話しているという、具体的に絵に描けるような言葉で話したり、文章を書いたりできるということ。タベ読んだ本の素敵なフレーズをそのまま話すということとはしない。言葉と実体をつなぐ概念が具象によって裏付けられることが必要です。

そして、一元一次方程式ではなくてと申しましたが、複眼の視野で、ものをよく見て、そして、多軸で、一つの考え方だけじゃなくて、いろいろな考え方で考えてみること。そして、しっかり焦点を当てて、よく見つめて考えるのですけど、でも、それが今日の冒頭に申しましたように、全体状況の中でどういう意味があるかということのを常に考えている。

それから、これは相手のことだけを対象化して、この人の足りないところをどうこうしようということよりも、むしろ、いつもの自分の生について問い直しているということが必要で、自分のことにまったく触れないで、何か相手にして施すというような感じの時というのは、本当にそこに関係が生まれて来ないのではないかと思います。

また、近接領域のいろいろな専門職の方、あるいは非専門職の方も含めて、いろいろな方々とよい意味での交流を持つようにし、自分一人でみんな背負おうとするよりは、コラボレーティブに、協調的に仕事をしていくということだと思います。

最後に、勉強というのは、自分の専門領域の最先端の文献を見る、話を聞くということも大事ですけど、本物に出会うということがとても大事だと思うのです。本物に出会うと、自分がわかってくる。自分をごまかしながらやっていることに気がついて、いつも新鮮になれるのではないだろうか。だから、いつも、そういう意味で、もっと高い、広い世界があるに違いないというふうに思って生きていくことが、実は、生活を基本から支えるアプローチの必須の要点ではないかというふうに思います。

どうもご静聴ありがとうございました。